

明治期における英国のレトリックの受容 (V)

——高田早苗『美辞学』における H. Spencer の引用——

有 沢 俊 太 郎

要 旨

『美辞学』(明22)には、多くの西洋人からの引用がある。詞姿論が展開されている第十章から十六章にかけては、スペンサー(H. Spencer)からの三回の引用が目目される。

引用の性格は、引用箇所を原文と比較し、更にそれを『美辞学』の文章の中に戻してみることによって、明らかにすることができる。

それぞれの引用部におけるキー・ワードは「対照法」「注意の節約」「文体」というものである。これらの語は別々には容易に訳出されているが、これらの語どうしの関係を理解することはむずかしい。これがスペンサーの引用が『美辞学』において本来の力を持ちえなかった理由である。しかし、これらの引用は来たるべき時代において新しい文体論を生み出すために、重要な役割を演じたことと考えられる。

1. はじめに

筆者は先に『美辞学』(前篇)の第一章から第九章にかけてペイン(A. Bain)の名前が頻出することに注意し、その引用の様相を検討したことがある⁽¹⁾。本稿では、これを整理し補足することから始める。

第一章から第九章は文学的な文章を読む際の目的と視点を説述した部分である。目的は「嗜好を満足させる」ことに置かれ、このような抽象的な目的を達成するために「崇高」「優美」「可笑」「詼諧」「滑稽」「嘲謔」の文章中の「分子」(元素)が用意されていた。ペインは、これらの語(訳語)に安定した意味を盛り込むために、しばしば参照されていた。そして、この試みは説明の対象が具体的であればあるほど成功を取っている。

例えば、「崇高」と「可笑」の説明は次のようになされる⁽²⁾。

・アレキサンドルペインは崇高の快楽の発生す可き場合を分ちて三となせり則ち第一柔弱。無力。強迫。畏懼等の状況より反跳したる場合。第二他人に於て勢力の発動する状況を見聞する場合。第三天然の勢力を目撃し若しくは之を胸中に思念する場合はれなり(第五章四十二丁)

・ペインは……自説を述べて曰可笑は。他に強盛なる感情を發することこれ無き場合に於て勢威ある人間若しくは事物が貶低さるゝに由りて始めて起る者なり(第七章八十～八十一丁)

これらの引用文はすべて“The Emotion and the Will”からのものである⁽³⁾。「崇高」や「可笑」とは何か、というのではなく、それらが発生する場合はいつか、という具体的な問題だけに翻訳、引用の作業も容易である。ほとんど同じ原文を捜し出すことができる。高田早苗はこのよ

うな作業をとおして訳語を揃え、新進の批評家として華々しい出発をしたのである。

しかし、読みの目的・理念にかかわる taste のような語を理解することは「崇高」や「可笑」の場合を記述するほど易しくはない。訳語「嗜好」の説明を読んでも、discrimination, intellect の語によって説明される taste の一側面がうまく移しかえられていないことに気づく。

人に嗜好なる者あり以て物の優美崇高なる者を識別して之を楽しむペイン曰「嗜好とハ美術上の製作を観て之を感じる性をいふ」と蓋し嗜好は何人と雖之を有する者なり児童が木偶絵画を愛玩し凡て新奇の事物を好むが如き又野蛮の民が歯骨を聯ね之を頸に懸けて人に誇り又文身を楽しむ唱歌を愛するが如きも皆嗜好に出づるに外ならず（第二章八丁）

taste の知的側面が「識別して楽しむ」として一旦はとらえられても、「感受する性」と置きかえられることによって、次第に見失われてしまう。子どもが絵を愛玩し、野蛮人が文身を楽しむ行為……と際限がない。

こうして、読みの目的（理念）と具体的な視点との間には矛盾が生じることになる。新しく造った批評用語を駆使して文章を読めば、確かに西洋流の読みになる。しかし背後にあってそれを支える精神が弱い。だから依然として「感々服々」「敬々服々」といった読みが終わる恐れがある⁽⁴⁾。そして、この矛盾は明治の修辞学全体に深くかかわっていることかもしれない。

以上のようなまとめと問題意識を念頭に置いて第十章以下の各章を読むことにする。第十六章までの七章では「嗜好の快樂」をもたらす「崇高」以下の分子が国語の文、文章をとおして説明されている。修辞学書には必ずみられる詞姿論が主である。説明は更に具体的になる。国語の文や文章に即して色々な修辞技法を説明するのだから西洋人の説はそれほど必要ではないはずであるが、実際には引用される西洋人は相変らず多い。次にそれをまとめておく。

第十章	修飾を論ず(第一)	ペイン, カルソン, クインチリアン
第十一章	修飾を論ず(第二)	スペンサー
第十二章	修飾を論ず(第三)	
第十三章	文体を論ず	スペンサー, ゲーテ
第十四章	文体に欠く可からざる要素を論ず(第一)	カンベル(2), デクインジー, コレリッチ, ホール, ブライアント, ジョンソン, ホホワイト
第十五章	文体に欠く可からざる要素を論ず(第二)	ゴールドスミス
第十六章	文体に欠く可からざる要素を論ず(第三)	ワット, コレリッチ, マコーレー, ベーコン, ミル, ワード, ホエートレー, デクインジー, スペンサー, ロンジナス, シセロ

ここではペインは一回しか引かれていない。代わってスペンサー (H. Spencer) の名前が見られるようになり、修辞技法（第十一章）、文体論（第十三章）、文体要素論（第十六章）と詞姿論全体にわたっている。引用は三回とも“The Philosophy of Style”（1858）から。原書は、I, II, POSTSCRIPT に分かれているだけであるが、後の考察の便宜を考え、私にやや詳しい目次を作成しておく⁽⁵⁾。

I Causes of Force in Language which Depend upon Economy of the Mental Energies (心力の節儉より来る言語の感動力を論ず)

- (1) Importance of General Principles (一般原理の重要性) 1・2
- (2) General Principles (経済主義を文字上に適用す) 3～8
- (3) Methods (方法)
 - ① Choice of Words (語の選択) 9～17
 - ② Order of Words, Phrases and Sentences (語, 句, 文の順序) 18～45
 - ③ Effect of Figures of Speech (形容的言語の効験) 46～63
 - ④ Arrangement of the Minor Images (思想を構成する小意象の排列) 64～67
 - ⑤ Supplementary Explanation (表現効果についての補足説明) 68～71
- (4) On Poetry (韻文の散文に勝る所以) 72～79
- II · Causes of Force in Language which Depend upon Economy of the Mental Sensibilities (感覚の節儉より来る言語の感動力を論ず)
 - (1) Application of General Principles to the Mental Sensibilities (一般原理の感覚への応用) 80～85
 - (2) Methods (方法)
 - ① Climax (漸層法) 86
 - ② Antithesis (対照法) 87
 - ③ Anticlimax (反漸層法) 88
 - ④ Supplementary Explanation (補足説明) 89～92
 - (3) On Style (文体論) 93～98
- POSTSCRIPT (付記) 99～101

2. 受容の様相

原書の目次に合わせて『美辞学』におけるスペンサーの引用箇所を確かめると次のようになる。

The Philosophy of Style	美辞学
II (2) ④ Supplementary Explanation	第十一章 修飾を論ず
II (3) On Style	第十三章 文体を論ず
II (1) Application...	第十六章 文体に欠く可からざる要素を論ず

引用文はすべてⅡからであるが、Ⅱ(1)は特にⅠとの関連性がある。またⅡ(1)はⅡ(2)とも内容的に近いから、これをまとめて初めに「表現の経済」の項目の下に考察する。次に、これを基盤に「文体の概念」として、Ⅱ(3)と第十六章との対応関係を考察する。

引用部の検討の方法は従来と変わらない。すなわち、

A 『美辞学』の引用部と原書の該当箇所とを比較する。

B 引用部が『美辞学』の前後の文章の中でどのような働きをしているか調べる。
の二つの観点から行う。

(1) 表現の経済

『美辞学』第十章から十三章には、19の表現技法が五類の下に分類され、例文に即してそれぞれの特徴が説かれている。その一つに対照法があり、ここにスペンサーからの引用がなされている。

A 引用部と原文との比較

『美辞学』第十一章に、

対照とは相背反せる事物を双々相向はしめ之が比較より生ずる所の作用によりて文意を明瞭にし其効験を増加せしむるを云ふハーバート。スペンサー対照を論じて「黒中に白を点ずるか或ハ白中に黒を点ずれば黒は弥よ黒く白は弥よ白しこれ対照の作用により人の視覚上に及ぼす所の効験なり文章上に対照の効験ある事または之に同じ云々」といへり（百四十四丁）

という引用文があり、これに対応する原文は次の如きものである。

Thus we see that the phenomena of Climax, Antithesis, and Anticlimax, alike result from this general principle. ... Reffering once more to phenomena of vision, every one knows that a patch of black on a white ground looks blacker, and a patch of white on a black ground looks whiter, than elsewhere. ... It is simply a visual antithesis. (II (2)④, 89)

引用部は上の文章の一部を採って成立していることが分かる。しかしこの文章は対照の効果色彩の比喩を用いて説明したものなので、引用者はもう一度言葉の問題に戻さねばならない。その結果が「文章上に対照の効験ある事または之に同じ」の文になって現れた。また、引用に先立って述べられた「……文意を明瞭にし其効験を増加せしむるを云ふ」も引用者の気持ちを明言しているとも言える。そして、これらの文が原文の中の“general principle”の内容に近い。

general principle とは、スペンサーの著書の全体にわたって繰り返して説かれているもので、その内容がこの著書のテーマともなっている。次の文章はその内容を対照法という一技法をとおして説明したものである。

In Antithesis, again, we may recognize the same general truth. The opposition of two thoughts that are the reverse of each other in some prominent trait, insures an impressive effect; and does this by giving a momentary relaxation to the faculties addressed. If, after a series of images of an ordinary character, appealing in a moderate degree to the sentiment of reverence, or approbation, or beauty, the mind has presented to it a very insignificant, a very unworthy, or a very ugly image; the faculty of reverence, or approbation, or beauty, as the case may be, having for the time nothing to do, tends to resume its full power; and will immediately afterwards appreciate a vast, admirable, or beautiful image better than it would otherwise do. (II (2)②, 87)

この文章で重要な点は二つある。一つは、対照法が言葉の順序の問題と考えられていることである。この考え方は漸層法 (climax) や反漸層法 (anticlimax) には無理なく適用される。例えば漸層法の場合、この文章中の語句を借用すれば、a very unworthy image → an ordinary image → a vast image という配列となる。反漸層法は文字通りこの配列を逆にすることによって、あ

る表現効果を得る。しかし対照法はなぜ順序の問題なのか。スペンサーは、それを、まず an ordinary image を置き、その後 a very unworthy image が来て（反漸層法）、そして a vast image を形成する（漸層法）一連の過程としてとらえている。つまり、対照法とは、漸層法と反漸層法とが組み合わされて成立する修辞法なのである。だから、これらの技法はまとめて取り扱うことができるのである(87の文章の冒頭)。更に I のその他の様々な技法とも関連するわけである(I(3)①～⑤)。順序とは様々な技法の根底にある抽象的な概念である。

先の文章でもう一つ大切なことは、その順序という概念が深く読者（聞き手）の能力（faculty）にかかわっていることが指摘されている点にある。文章を読むということが、読者の諸能力を消費することと引きかえになされる行動であるならば、書き手が順序を整えるということは読者のエネルギーの消費を最小にしつつ効果を最大にするための方法である。

このような方法の背後にはスペンサー独特の言語観がある。言語は思想を運ぶ道具であるが、同時に妨害物でもある。読者の精神的（感覚的）能力には限界がある⁽⁶⁾。そこで、言葉の使い手は、言葉が妨害物とならないよう努力を惜しんではならない。これが「表現の経済」という考え方である。

On seeking for some clue to the law underlying these current maxims, we may see shadowed forth in many of them, the importance of economizing the reader's or hearer's attention. ... Regarding language as an apparatus of symbols for the conveyance of thought, we may say that, as in a mechanical apparatus, the more simple and the better arranged are its parts, the greater will be the effect produced. (I (2), 5)

Keeping in mind these general truth, we shall be in a condition to understand certain causes of effect in composition now to be considered. ... And hence we may expect that vividness with which images are realized will in many cases, depend on the order of their presentation. ... (II (1), 85)

順序が整えられて分かりやすい文章は効果もあるのであり、逆に効果を与えるということは分かりやすさを抜きに考えることはできない。順序(arrange, order)は、様々な技法(効果)をまとめ上げつつ、新たに表現の経済(分かりやすさ)とを媒介する概念でもある⁽⁷⁾。

さて、『美辞学』における「…文意を明瞭にし其効験を増加せしむる…」の文は、このような性格の general principle をどの程度とらえているか。第十六章にこれをうかがう手がかりとなる文章がある。

文章をして簡約ならしめんには如何すべきか蓋し削正と緊縮とに由らざる可からず夫れ其始めて之を読過したる時に当りては毫も無用の言辞なきが如き文章も反復査察を加ふる時は之を削除するも敢て妨なき字句あるを発見すべし今日は多忙の時なり故に文章を作る者も須く読者の注意の節約を旨とす可しハーバート。スペンサーが其文体論を著はすに当り注意の節約を以て作文の大主眼となせるハ蓋し之が為めなりとす(二百十五～二百十六丁)

カッコの付された引用文ではなく、これは著者のスペンサー理解の深まりを示しているのかも知れない。「簡約」という言葉が「文意の明瞭」の代わりになっているとみれば、確かに原理の一端が正確に詳しくとらえられているのである。しかし、この文章には「文意の明瞭」（分かりやすさ）と対になり切り離すことができないはずの「効験」（効果）に当たる語がみられない。さらに、「注意の節約」を述べるにはどうしても必要な「順序」という語もない。これがなかつ

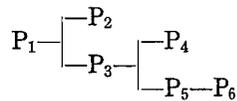
たならば、理念は技法に結びつかない。それではこの「注意の節約」とは本来の *general principle* と似ていて違うものではないか。変形された概念は確かに手軽に使い易いけれども、文章全体の中に置くと、力を持ちえないのではないか。次に、この点を検討する。

B 前後の文章との関係

先の「注意の節約」を含む文章を全体の文章の中に戻してみる。全体の文章とは、第十六章中の「勢力」の項である。これを段落ごとに区切り、小見出しを付けて示す（先の文章は第四段落の一部である）。

- 第一段落 (P₁) 勢力はなぜ必要か
- 第二段落 (P₂) 勢力を与える方法 (1)
——思想の真実——
- 第三段落 (P₃) 勢力を与える方法 (2)
——文辞の簡約の得失——
- 第四段落 (P₄) 削正と緊縮
- 第五段落 (P₅) 冗語の必要性
- 第六段落 (P₆) 詳密の必要性

これらの段落相互の関係は次のように図示することができる。



この図が示すように筆者の関心は P₃にある。P₄~P₆の三段落は P₃の内容をやや詳しく述べているにすぎない。似ているのは内容だけではない。論旨の運びも P₃の内部のそれをなぞっている。P₃は次のような段落である。

文章の勢力あらんことを欲せば其文辞明晰にして且簡約なるを要す蓋し文辞の明晰なるは著作者其説を述ぶるに当り唯思想にのみ依頼して文辞には依頼せざるの跡を示すものなり故に仮令ひ明晰其度に過ぎて或は率直に陥ることあるべきも題目に由りては啻に妨げなきのみならず却て文勢を増加することあり然れども率直を欲する為に粗陋に流るる事ある可らず言辞の粗陋なるは文勢を弱むるものなりワード曾て論じて曰「粗陋難渋ある文辞は円滑流暢なるものよりも文勢を増すが如く思惟する者多し然れども是れ甚だ僻事なり巖石の間を流るる所の水は阻碍なき河流よりも小なり」と（二百十三~二百十四丁）

波線部の「然れども」で論旨は逆転している。この接続語によって「簡約」の大切さを説くことは打ち切れ、そのマイナス面が強調されるようになる。これが P₄と P₅(P₆)との関係を端的に指し示す。つまり P₃の形式と内容は、P₄と P₅(P₆)の関係を集約して示しているわけである。

P₅と P₆の冒頭は、

- ・右に述べたるが如く簡約は文章の勢力を増加するが為に欠く可からざる一大要素なりと雖……(P₅)
- ・簡約は固より文勢を増すに必要なりと雖……(P₆)

というものである。「雖」は、P₃の「然れども」に正確に対応しているのである。

これは、P₄で述べられるスペンサーの考え方がどの程度、引用者高田早苗によって重視されていたかを知るために見逃せない事実である。スペンサーの思想の核心にある「注意の節約」は

「簡約の大切さ」という観点から重宝な言葉として引用されるけれども、段落の外内においてすぐ逆説の接続詞によって否定されてしまう。スペンサーの *general principle* は、『美辞学』においては、狭く限定された範囲では力を振っている。しかし、それを全体の文章の中に置いたとき、力は殺がれて、他の様々な西洋人の諸説の間に紛れ、その中に埋没する危険性さえ認められるのである。

(2) 文体の概念

文体についてスペンサーから引かれた文章は第十三章にある。これを対応する原文とともに示す。

A 引用部と原文との比較

……⑥然りと雖格段なる某々の文体を最良として専ら是れにのみ模倣するハ偏狭に失する事あるを免かれず⑦ハーバート、スペンサー云へる事あり「格段なる文体のみ墨守するはこれ自ら求めて言語文辞に貧なるものなり千変万化縦横馳騁を目的とし其描写すべき題目と其内心の感情とに従ひて之に相応せる文体あるべきなり」と⑧実に然り⁽⁸⁾ (百七十五丁)

... One in whom the powers of expression fully responded to the state of feeling, would unconsciously use that variety in the mode of presenting his thoughts, which Arts demands. ... To have a specific style is to be poor in speech. (II (3), 95)

訳文は原文の前後が入れかえられて成立している。更に訳文の後半は次の文章も参照してつく上げられたものであろう。

... His mode of expression naturally responding to his state of feeling, there will flow from his pen a composition changing to the same degree that the aspects of his subject change. He will thus without effort conform to what we have seen to be the laws of effect. (II (3), 98)

この文章の中から *subject, change* などの語が適宜選択され、翻訳されて「題目」「千変万化縦横馳騁」の語を生み出しているとみられる。

ところで、原文には *unconsciously, naturally* という語がある。これらの語は、この文体論が「注意の経済」の法則 (*the laws of effect*) を手がかりに、複雑煩瑣な規則集から個人の表現の多様性を認める方向に移行していることを物語っている。文章を書く(読む)ことは、個人の外に厳然として存在する修辞規則に沿って行われる業ではなく、個人がある題目を見、そこで喚起される感情に応じて行われる業である。言葉は内から生成される。しかし、これは文章の修業が努力すれば万人に可能なわけではなく、個性(天性)に委ねられる度合いが大きくなるということでもある。スペンサーの文体論は、ともすれば修辞学そのものの存在理由さえ問われかねない方向に、論を展開していることになる。これを象徴的に示す語が *unconsciously* であり、*naturally* である。外的な規則とは対照的な性格をもつ個人の文体を得る方法は、このような語で言い表すよりほかはない。

しかしスペンサーの *unconsciously, naturally* は「無意識に」「自然に」と簡単に置きかえられない側面もっている。例えばスペンサーは個人の文体を得る方法を次のようにも説明しているからである。

Let the powers of speech be fully developed, however—let the ability of

the intellect to utter the emotions be complete; and this fixity of style will disappear.
(Ⅱ (3), 97)

感情のおもむくまま筆を駆ればそれでよいはずはなく、そこには「知性」が関与する。つまり恣意的な感情を統制する知的能力が必要なのである。これを具体的に言えば、スペンサーの主張する *general principle* を理解し身につける力を指していることは言うまでもない。

訳文はスペンサーの原文がよく消化されていて、「格段なる文体をのみ墨守する」ことの弊害が明快に述べられている。しかし、*unconsciously, naturally* の訳語をつくって、その概念を規定することは行われていない⁽⁹⁾。もし、これらの語に明確な意味を与えて文章中に用いることができれば、「千変万化縦横馳騁なる言語文辞」を方法的に肉付けすることができる。『美辞学』はスペンサーとともに新しい文体論に踏み込むということにもなる。しかしこの作業は行われなかった。その結果、高田早苗による *style* の理解は新旧の概念が入り混じったそのままの状態にとどまっている。次にその様相を示す。

B 前後の文章との関係

先に示した⑥～⑧の前後には次のような文がある。第十三章の冒頭の一段落分である。

①文体とは言語若くは文辞を以て思想を表明せんがために著作家の用ふる所の格段なる方法をいふ②英語にて之を「スタイル」と云ふは蓋し羅典語のスタイラス (Stylus) より出づ③「スタイラス」とは羅馬人が文字を蠟盤に書するに当り筆として用ひたる器具の名なり④夫れ文章の道変化極りなく人々の文体は其性質に随ふものなるを以て人異なれば文体も亦之に依りて異ならざるを得ず⑤余輩須らく其秀でたるものを以て模範となすべきなり→⑥→⑦→⑧→⑨英文学の大家にてもスウィフトの素樸なるアッチソン。マコーレーの高雅なる素と皆名文なりと雖余輩ハ及ばぬまでも一人万人のシエクスピヤーを慕ふべきなり⑩但し万能に長ぜんと欲して却て一芸に達せず其作所の文章勢力を欠くの弊に陥る者も亦多し⑪故に広狭何れにも偏倚せず文勢と題目と感情とに伴ハしめ以て文章に熟達せん事を希ふべきなり (百七十五～百七十六丁)

この文章の文と文との接続関係を分かりやすく整理して示すと、

- ①②③ 文体の定義
(ダカラ)
- ④ 人間の性質に関係する
(シカシ)
- ⑤ 模範となる文体はある
然りと雖
- ⑥⑦⑧⑨ それでは偏狭になるから多様性を認めるべきである
但し
- ⑩ その弊害もある
故に
- ⑪ 広狭いづれにも偏らず題目と感情に応じる (結論)

と書きかえることができる⁽¹⁰⁾。ここではスペンサーからの引用 (⑦) は、「注意の節約」の時とは違って、文章の中に埋没せず、再び結論 (⑪) において受け止められている。⑦とほとんど同じ内容ながら、筆者がこれを取り立て、しかも、結論としたということの意味は大きい。文体は確かにここで新しい光を当てられているのである。明治の文明開化により、言葉と事物との素

朴な結びつきが断ち切られた時、急拠、輸入紹介されたのが西洋のレトリックであった。これによって人々は新しい表現（理解）対象に応じて言葉を秩序づける術を知り、よって新時代の表現力、理解力を得ることができたのである。それが『美辞学』の刊行された明治二十年の前半において、早くも明治初期の修辞学書とは違う性格が紛れ込んでいることは、後の文章観の変遷をおもうとき興味深いものがある。

しかし、反面その結論がいかなる過程を経て導き出されているか。それは先の文章（図）が示すとおりでである。文と文との結びつきの緩さは、私に接続詞(カタカナ)を入れて読んでみても、解消しない。論旨は、緩いまま、右に左に揺れ動く。そしてこれは古い考え方と新しい考え方にはさまれている著者の姿を浮かび上がらせる。著者は古い修辞学の価値と応用力の広さを知り尽くしていたのであろう。それがスペンサーに触発され、結論とするまでの接続関係に反映しているのである。

これはスペンサーの style に託した概念がそれだけ漸新だったことを示す根拠ともなる。ギローは、スペンサーの文体論が「数すくないころみ」だったと述べ、当時のヨーロッパの反応を「……決してそのあとを引き受けてやろうとしなかった。言語学は、文法書の巻末にむかしながらの「修辞のいろいろ」の一覧表を載せるとか、作家についての特殊研究の附録にその作家の使ったおもな〈あや〉の、うわつつらだけで単に記述的な目録を載せるくらいのことではがまんしている」⁽¹¹⁾と述べているが、この評言はこの明治の修辞学書のスペンサー理解の様相をも的確に言い当てている。引用することによって新しい文体論を構想する手がかりを与えられながら、詞姿の分類は従来までの方法から一歩も出られず、「一覧表」を作成することにとどまっている⁽¹²⁾。

例えば「対照法」の位置にしても、

- 第一類 類似 ①明比 ②暗比 ③寓言 ④引語
- 第二類 関係 ①易名 ②相換 ③写声
- 第三類 反対 ①対照 ②警語 ③誇言 ④疑問 ⑤暗述 ⑥暗諷
- 第四類 位置 ①漸層 ②反漸層
- 第五類 雑種 ①直現 ②頓施 ③擬人 ④嗟嘆

の如き一覧表が示すとおりであって、新しい文体の概念（表現の経済、順序）の下に、詞姿を再編成しようとしたスペンサーの意図は生かされていないのである。

3. ま と め

これまでの考察をとおして明らかになった点を次に簡条書きにまとめ、スペンサーの引用の性格を考えてみる。

- ① スペンサーからの引用は「対照法」「表現の経済」「文体」の三領域にわたっている。
- ② 対照法と表現の経済をつなぐのは、order, arrangement という語であるが、これが訳出されていない。したがって、修辞の技法と背後にあってそれを支える理念は統一的には握られることはない。そしてこれは理念の歪みをもたらし、よって文章中での働きも弱い。
- ③ これに対して文体の概念はかなり重要視されている。ここには新しい文体論が構築される手がかりがある。

- ④ しかし著者の旧修辞学への愛着は強く、まだ著者自身の言葉で新しい文体論を展開することができない。naturally, unconsciously がは握されていないことが直接的な問題点である。
- ⑤ 『美辞学』は新旧の考え方が衝突する場である。そこには多くの矛盾がある。それは段落相互の関係、文の連接といった言語的事実に鋭く現れている。しかしその矛盾の中に新しい時代への胎動が感じられる。

以上の点が指摘されるように思われる。高田早苗によるスペンサーの理解の特徴は、個々の事項の理解の正確さに比べて、事項どうしの関係の理解が及ばなかったということであろう。個々の説は巧みに自説を補強するために利用され、修辞技法に至ってはすぐ国語の文章に応用された。しかしスペンサーの内部で統一され秩序をもっていた修辞学の体系は『美辞学』では崩壊している。これは多くの引用の宿命である。自己の著書という新しい体系の中に無理なく異質な要素を入れるには、それが断片的であればあるほど使いやすい。いつでもどこでも自己の論の展開に合わせて用いることができる。しかしそれでは簡便ではあっても著書の中で強い生命を保つことができない。関係をとらえない限り、新しい関係の中でそれを変形して生かすこともむずかしいことなのである。

『美辞学』には、このような特徴がある。それはこの書の限界といってもよいかもしれない。しかしこのような限界はあっても、それぞれの訳文（語）は当時の読者に新しい考え方の存在を知らしめ、自らの思考に新鮮な刺激を与えたことは確かであろう。それは具体的な技法だけにとどまらない。「文体」「注意の節約」の如き抽象的な概念についてもそれらが書き手、読み手という言語主体を意識して初めて生まれ定着することを思えば、このような言葉は訳されただけでも大きな意義をもっているといえよう。この意味で、スペンサーの受容については『美辞学』は先駆的な書である。この書ではなし得なかったことが後の修辞学書ではどのような取り扱われ処理されているか⁽¹²⁾。それを知ることによって『美辞学』におけるスペンサーの引用の価値と限界は更に明確になると思う。

以上で『美辞学』（前編）の考察を終える。前半のベイン、後半のスペンサーという中心的な人物の引用を検討することによって、ある程度この明治期の代表的な修辞学書の性格を明らかにすることができたと考える。簡条書きで示した事項は、次に、学校教育の場へ応用されていく過程で、また新たな価値と問題点をもってくると思われる。

受容された修辞学は学校の実践的な要請に対処するためどのように受け止められ、伝えられたか。これは、修辞学書どうしを比較検討することと同時に、今後考察すべき重要な課題である。

注

- (1) 「明治期における英国のレトリックの受容 (IV)——高田早苗『美辞学』における Bain, A. の引用——」（『富山大学教育学部紀要 第31号』昭58.3）
- (2) テキストは金沢大学付属図書館蔵本。なお引用に当たって、字体は現行のものに改めた。合字略字についても同じ。
- (3) “The Emotions and the Will” (Longmans, 1859, 1875³, pp. 247~248, pp. 256~258)

- (4) 「批評といふ事は此時迄は漢学者流の「感々服々」とか、「敬々服々」とかいふ種類のものばかりで、上げたり下げたり、分析する様な西洋流の批評は全く無かったのであるから、私の『書生氣質』や『佳人の奇遇』の批評其物は、勿論今日から見て取るに足らぬものであるのみならず、自分ながら背に冷汗が出るのであるが、併し我国に於ける西洋風の批評の元祖であるといふ事だけは、言って言はれぬ事がない様に思ふ。」(高田早苗述『半峰昔ばなし』早大出版、昭2, pp. 190~191)
- (5) テキストは、荒牧鉄雄訳注の“The Philosophy of style”(大学書林、昭47)である。なお小見出しのうち下線の付された部分はスペンサー自身のもの。カッコ内の訳のうち、下線の付された部分は、鶴田久作訳『修辞論』(開新堂、明28)による。また小見出し横の数字(1, 2…)は訳注者によって付された段落番号で、以後、引用は章、節の外、この数字を添える。
- (6) … language must be regarded as a hindrance to thought, though the necessary instrument of it, … (II (2), 7)
- (7) 「……語の選択、語の配置、または文のきり方や個々の詞姿にいたるまで、文章手法のいっさいはこのような注意経済の原理にもとづいて成立している。」(波多野完治『文章心理学』大日本図書、昭40, p. 101) という指摘は的を射て適切である。
- (8) ⑥⑦⑧は私に付したものと。一段落の文章の文の位置を示す。
- (9) これは第一章~九章における taste の訳語の性格とも関連性を持つと思う。
- (10) カタカナの接統詞は私に付したものと。
- (11) ビエール・ギロー著、佐藤信夫訳『文体論』(白水社、昭34, p. 42)
- (12) 著者はこの分類を「ベイン。カルソン等の説を折衷し少しく余の考案を加へて」行つたと述べている。(百十二丁)
- (13) 例えば、中島幹事『文章組立法(教育適用)』(開新堂、明24)、『補正文章組立法』(開新堂、明26)。

Acceptance of British Rhetoric in the Meiji Era (V)

—On Passages in “Bijigaku” from H. Spencer—

Shuntaro ARISAWA

SUMMARY

In Sanae Takada's “Bijigaku” (1889), there are many passages from Europeans. From chapter 10 to chapter 16, where the theory of “figures of speech” is described, three passages from H. Spencer are noticeable.

By comparing these passages with the original and putting them in the context of “Bijigaku”, we can clarify their characteristics.

Key words of the three passages are “Antithesis”, “economy of the reader's attention” and “style” respectively. These words are easy to translate into Japanese, but the relations between them are hardly understood. This is the reason why the passages from Spencer are less effective in “Bijigaku”. These passages, however, will play an important role to make a new stylistics in the following age.

KEY WORDS

rhetoric レトリック
H. Spencer H. スペンサー

acceptance 受容
Bijigaku 美辞学